

子規會誌

九五号
 平成十四年
 十月

第一〇一回子規忌法要	一
『子規言行録』を読む	二
松山子規会 初代会長 菅 菊太郎先生 (下)	二
札幌農学校時代の面影	一
美の創造者 正岡子規	——画について—— (一)
卓話 下村為山について	二〇
卓話 寒川鼠骨について	三〇
卓話 井手康夫	三二
卓話 高橋俊夫	三〇
卓話 宇和宣	二〇
卓話 谷光隆	一一
卓話 乾燕子	二
卓話 子規記念博物館編	三五
平成十三年度 正岡子規ほか研究資料・文献目録	三五

例会 記録

○平成一四年七月例会（第七一四回）

七月一九日（金） 正宗寺本堂 出席者 三二名

講演「子規の病状」

大阪成蹊女子短期大学教授 副会長 和田 克司氏
まず、今日は仰臥漫録を意識しながらお話をしたいと前置きされ、直筆を見たときの感動について述べられた。あの病状の中でどのようにして書いたのだろうか、その疑問を解くべく、書き方の技術的な面についても言及された。

次に本題に入られ、明治二九年一月から同三五年九月までの子規の病状を十段階に分け、その折々の写真のコピーも提示されながら、丁寧の説明された。また明治三四年六月一日、同十月一五日、明治三五年二月一五日と、三通の大原恒徳氏宛て子規の書簡も紹介された。

子規の病状、またその苦痛は一通りではなかったことがよく分かり、その中での子規の「仰臥漫録」をはじめとする作品がすばらしいものであることを、改めてお教えいただいた。

井手 康夫氏
卓話 「下村為山について」
高橋 俊夫氏

○平成一四年八月例会（第七一五回）

八月一九日（金） 正宗寺本堂 出席者 三二名

講演「鷗外と子規」

理事 池内 央氏

はじめに生まれ年や在所、学歴など鷗外の経歴の概略を述べられてから、鷗外と子規を対比して並べた詳細な価値ある配布の資料を基に、鷗外と子規の交流についてエピソードを交えながら、一つ一つ丁寧にお話いただいた。鷗外と子規の間には文学者としての深い交わりがあったこと、そして互いによい関係を維持しながら影響を受け合っていたことなどについても述べられた。

また、洋画家で書家の人格者、中村不折との交流をはじめ、鷗外と子規の間には多くの人材がいたことも御教示いただいた。

卓話 「寒川鼠骨について」 井手 康夫氏

○平成一四年九月例会（第七一六回）

九月一九日（木） 正宗寺本堂 出席者 七五名

子規忌法要

講演「子規言行録を読む」

副会長 乾 燕子氏

はじめに枕として『子規言行録』や愛媛新聞のホームページなどの紹介があった。続いて本論に入られ、寒川鼠骨著の『子規に付いて松山人の記憶して貰いたいこと』『子規言行録序』・河東碧梧桐著『母堂の断片』『君が絶筆』などの資料を提示、陸羯南、加藤拓川など、存在を忘れてはならない人々のこと、子規さんの幼児から少年時代のこと、教養のこと、絶筆を記したときの有様などについて詳しく話された。

人間子規について、また一段と、広く深くご教示いただいた御講演であった。

第一〇一回子規忌並びに物故会員法要

墓前祭 子規埋髮塔前
 本法要 正宗寺本堂

司会 常任理事 宇和 宣氏

法要読経 正宗寺法務統括住職 田中 義雲師

子規遺作朗詠 尺八演奏 会員 桐間 龍芳氏

漢詩「寒叔に寄す」 会員 渡辺 泰山氏

短歌「ベースボールの歌」 会員 永田 麗扇氏

俳句「辞世三句」 会員 松本 松陽氏

献詠披講 副会長 乾 燕子氏

焼香並びにあいさつ 会長 浦屋 薫氏

焼香 遺族代表 佐伯 徹也氏

名誉会長 和田 茂樹氏

来賓・役員・有志

会長 浦屋 薫氏

閉会のことば

子規忌法要供物御礼

(順序は五十音順)

献詠
 頼祭忌祈る人の背みな同じ 相原左義長
 職退きて俄農夫の秋茄子 安藤 茂女
 野球の駅に佇み子規しのぶ 池田 幸

青墨の匂ふ師の匂や時鳥 石丸 律子
 命毛に不滅のちから頼祭忌 乾 燕子
 鶏頭然ゆ子規の好みし色にもゆ 乾 燕子
 子規さんと親しく呼ばれ頼祭忌 木戸 一子
 癒えし身を労はられつ、月見かな 敷村久良子
 外国のひと集ひて頼祭忌 土居 桂子
 束の間の雨にうるほふ葉鶏頭 藤原 十重
 子規忌かな流れ百年大河なす 松岡也寸志
 今になほ語り尽せぬ子規祀る 松本 博之
 石二つ子規を話すか月の夜 山本耕一路
 旅に出る子規の銅像動きそう 山本耕一路
 ふるさとに明治の香り頼祭忌 和田 数子

御供料 石丸 律子様
 鶏頭 池田 幸子様
 糸瓜 池田 幸子様
 糸瓜 浅海 好美様
 糸瓜 風本 幸子様
 温泉煎餅・塩煎餅 和田カズ子様
 玉泉堂様

『子規言行録』を読む

乾 燕子

没後百年を迎える今日の松山子規会の子規忌の席でお話をさせて頂くことは、私にとりまして極めて重責を感じる次第です。昨年は百年祭の厳粛な行事が執り行われましたが、さらに半世紀をさかのぼる昭和二十六年に松山市で子規五十年祭が実行され、「正岡子規と現代俳句」（中村草田男）、「子規居士の追憶」（鈴木虎雄）、「歌人としての子規」（土屋文明）、「人間としての子規」（安倍能成）の記念講演が行われ、翌年には、『正岡子規』と題する記念誌が協賛会によって刊行されております。

その中で特に私の目を引く一文がありますので冒頭の部分を読み上げてみます。お手許に資料を配付しております。筆者は寒川鼠骨です。根岸子規庵保存に尽した人物です。この子規庵のホームページについて紹介します。

子規に付いて松山人の記憶して貰いたいこと

寒川 鼠骨

子規居士が病床六尺の天地で書き擲ったのは、纔に八年しかも疾病の療養の片手間である。俳句に和歌に写生文に

その偉大な業績は、世間の認めて居る事であるから私の駄弁を要しない。子規居士が大学を落第し、俳句の行脚を思ひたつたりは実に大胆な様であるが、おそらく子規居士には、充分な成算が有つた事であらう。扱て俳句で凡てを批判して、やつて行く自信は大学やその他で学んだ根底に基くもので、その自信に燃えきつて居た事は、感心であつたので、それが大当りに当つたものである。

大学を子規居士は止めて、伯（叔）父の外交官加藤恒忠氏の紹介で日本新聞社主筆陸羯南先生に面会した。さうして子規居士は自分のやつてみたい事は、俳句それから俳論等を書いてみたいと羯南先生に話した。一般の新聞でその当時俳論に頁を与へる事はなかつた。陸羯南先生は、なにしろ自分の同窓の加藤恒忠氏の依頼だから何でも良い入社して、自分の思ふことをやつてごらんと言ふ事で、子規居士は、日本新聞に入社した。爾来大全集に乗せられて居る原稿を新聞に載せた。陸羯南がなかつたら日本新聞もなければ子規も成立つてゐなかつたのである。それで大子規の

生れ故郷である松山の人は、陸羯南先生を忘れて貰ひたい。陸羯南は加藤恒忠と法律学校の同窓であつた。津輕の出身で真に國を憂へた国士であつた。加藤恒忠は松山市長もやり、拓川集も出てゐて私は御話しする必要がない。唯だ子規居士と加藤恒忠の間柄を私が見た目通り御話ししたい。子規居士と加藤恒忠氏は、伯(叔)父と甥の間柄である。加藤恒忠は子規が大學を止めた事を困つた事だと思つたらう。そこで陸羯南にでも頼んで日本新聞にでも入社させるより、しようがないと思つたらしい。加藤恒忠は、子規が姉の子で有るので子規を大切にされた事は勿論であつた。

子規が忽ち名声がたかくなると恒忠は時々尋ねて来て病床の隣の八畳で酒を飲んで話してゐた。

そうして至極円満の様であつたが、子規は、恒忠を信じないと私達に言つて、恒忠は人間がだめで、大きな人間にはなれない。どうしてですかと尋ねると外交官とは唯だ其場を誤魔化す事だと思つて居る。外交官とは真実の事をしないとだめだと言つて恒忠を、人としてこんな風に信用しなかつたが、而し兎角加藤恒忠が陸羯南に紹介したことが子規居士の一生を支配したのであるから、この事も松山の人としては忘れられない事である。子規居士、加藤恒忠、陸羯南は、いやしくも俳人である子規を生んだ松山の人は忘れないで貰ひたい。

『正岡子規 五十年祭記念』(子規五十年祭協賛会編)

続いて旧友会による子規庵保存のことなどに触れております。その子規庵の最近の活動については、先程ご紹介のとおりです。

それでは本題『子規言行録』に入りたいと思います。この書物は、子規居士四十九日逮夜をもつて編まれたもので次の序文でわかります。ここに叔父加藤恒忠を介しての子規と陸羯南との出会いがはつきりと示されております。同時に子規の人間像が余すところなく示されています。

子規言行録序

何か一藝に秀でた人は、その藝の爲めに全體の人格を掩はれて仕舞つて、只だ藝だけを以て世に持て囃さるゝことが多い。例を挙げれば、細井廣澤といふ昔の書家であるが、この廣澤は立派な儒者であつて又た立派な政事顧問であつたのみならず、廣澤は最も武藝に長じ又た兵學に通じたのであつた、であるが、廣澤の始めて文徵明の書風を江戸の眞中に弘めて、元祿時代の日本を其の筆跡にて風靡した處から、今も多くの人は廣澤は徵明流の書風の元祖として又た近古第一流の書家として記憶する、それで廣澤の他の長所寧ろ廣澤の人格の全體を知る者は少ない。

廣澤は随分長命した人であるが、何にせよ當時封建の盛

んな際で、只た一藩の抱へ儒者たるに止まつて、シカモ太平の世であるから、其の技能抱負を施すことが出來ずに一世を終つたのである、廣澤と彼此同時であるが、松尾芭蕉寶井其角などいふ俳人たちも、其の言行の超凡にして一世の欽仰を受けたことから考へると、全體の人格は餘ほど優れて居つたものとせねばならぬ、俳人としてのみ持難さるゝのは、この偉人共の爲めに惜むべしである、兎角世間はその人の學問や技藝のみを見て人格の全體を問はぬ風がある。芭蕉は俳人の宗とする所であるが、俳句に於ては芭蕉よりも巧なる人は幾人もあつたらう、歌人にした處で加茂眞淵の門人で眞淵よりも上手な歌読みは少からぬやうであるが、人々が欽仰して師の翁と崇めたのはその人格の超凡であつた證據といはねばならぬ。

明治十六年の夏のころと記憶して居るが、友人加藤拓川（今の白耳義國在勤全權公使恒忠）が佛蘭西へ往かうといふので、語學練習の爲めに築地の天主教會堂に寄宿して居た、或日子の寓居に來て色々話した中に、「此のころ國元から甥のヤツが突然やつて來たが、まだホンの小僧で何の目當も無く、何にしに來たのかと聞いたら、學問しに來たと云ふてる、僕も近々往くのだし世話も監督も出來るじゃ無し、いづれ同郷の人に頼んで往くのぢやが、君の處へも往けと云つて置いたが、來たらよろしく逢つてくれ玉へ」との話もあつた、二三日たつとやつて來たのは十五六の少年が、

浴衣一枚に木綿の兵兒帶、いかにも田舎から出だての書生ツコであつたが、何處かに無頓着な様子があつて、加藤の叔父が往けと云ひますから來ましたと云つて外に何も云はぬ、ハア加藤君から話がありました、是から折々遊びにお出なさい、私の宅にも丁度アナタ位の書生が居ますからお引合はせしませうと云つて予の甥を引合はした、やがて段々話す様子を見ると、言葉のはし／＼に餘程大人じみた所がある、對手になつて居る者は同じ位の年齢でも、傍から見ると丸で比較にならぬ、叔父の加藤といふ男も予より二つもわかい男だが、學校に居る頃から才學共に優ぐれて予よりは大人であつた、流石に加藤の甥だと此の時早や感心した、その後當分見えなかつたが、二年もたつた頃尋ねて來た、其の時はや大學豫備門に這入つて居るとのことであつた、予は驚いた、田舎から出て來て二年も經たぬ内に豫備門に入るなどは餘程珍しい方である、その後久しく見えなかつたが、予の『日本』を始めたころ留守中に名刺があつたことがある、其の頃高橋自侍庵（健三）は官用にて佛蘭西へ往く事になつたから予は加藤に宛て、紹介状をやつた、二人は彼の地で一見舊の如くであつたそうだが、やがて高橋が歸朝して、加藤から托せられた獨逸文のエステチツクの書物を其の甥に届けねばならぬと云つた、多分本人が注文したのであらう、加藤の甥と云へばアの少年だが、なるほど今ごろは大學に居る筈だ、併しモーこんな書物を

讀むやうになつたかと驚いて話したことがあつたその後、文科大學に居るといふことを聞いたが、二十四年の秋予根岸の寓を尋て來て來年は卒業の筈だが、病氣の爲に廢學する積りだと語る、ドンな病氣か知らんが我慢して卒業したらどうかと勸めても決心はなかく、動かせない、近ごろ俳句の研究にか、つて少しく面白味が付いて來たから、大學をやめて専ら之をやらふと思ふと言ひ、根岸に座敷を貸す家があらば世話してくれと云つて歸つた、その晩端書に「秋さびて神さびて上野あれにけり」といふ一句をかけたのが來た、この時予は俳句の趣味などを少しも解せぬ、こんなものを研究してどうする積りか、病氣保養の爲めとあらば格別だが、これで文學に貢獻せんなどといふのは、アの男の了簡違であるまいかと、一人で心配して居つた、ちよつど寓居の向ひに老婦獨住ひの家があつて誰か確かな人に下宿させたいとのことであつたから早速そのことを報じてやつたら、すぐやつて來てやがて引越して來た、是れから隣同志となつて、毎日往來する間に俳句の味が少し分りかけて來た、其のころ新聞紙上に十七字の句を出す者は其角堂永機の輩か左もなくば角田竹冷の徒でそれも至つて少ない方であつた、どうだ何か『日本』へ出して見たらばと云つたら、かねて書いてある紀行でも出さうとのこと、それからそれと俳句まじりの紀行などは出た、これが抑も正岡子規の初陣である、其後の事は子規の名聲と共に大概世に

知れて居る、愈、この世を去つて後は都鄙の諸新聞争つて逸事遺聞を記し、又其の人格を各方面より觀察て書いてある。今度それ等の切抜を集めて一冊にまとめ。其れを同好に頒たんといふのである。追つて子規門下の人々等はその詳傳を編まん時には最好の材料ともなるであらう、子規に親炙した人々は皆なその人格の超凡を知つて居るが、世間一般ではよく知らぬ、甚しいのは只新派俳句の宗匠とのみ思つて居るやうだ、矢張り一藝を以て全體を掩はれた仲間である、子規が文壇に出陣してから僅に十年にて世を去つたのだが、十年間のその七年は病床の上で暮した、それで世を風靡した勢力といふものは學門藝術の力ではなく、全く其の人格の超凡な證據である、僅かに十年の間でシカモ病床でアレ程の名聲を成したのだ、若し健康であつて尚ほ世間並に二十年も長命したならば、まだく、仕事をしたであらう、文學ばかりでなく、政治界にも飛出して仕事をしたであらう、思慮といひ氣魄といひ何處にでも當てはまる人格であつた、詳しいことは『子規隨筆』と併せて本書を見ればおのづから分かるであらう。

子規居士四十九日速夜

羯 南

子規は生涯で最も嬉しかつたことをいくつか取り上げて、その中の一つにはじめての上京を挙げています。叔父加藤恒忠が急に子規を東京へ呼び寄せたのは、自分の渡仏前に

陸羯南に引き合わせて出合いの機縁をつくる考えであつたかと思ひます。それが時の経過とともに大きな実を結んだことは寒川鼠骨の言葉のとおりです。

子規の多面性は、俳句に和歌に写生文に、絵に發揮されますが、ジャーナリストとしてあるいは政治家としての發展を阻んだのは、健康であつたことは無念です。

『子規言行録』には、子規没後の広範囲な新聞紙上の反応が網羅されております。しかし、私の今回取り上げたいのは、伝記資料としての側面です。

まず碧梧桐の採録した母堂八重さんの語る幼少の子規の思い出です。その根底にある母親の愛情を読み取るべきだと思ひます。松山の方言が生き生きと伝わってきます。

母堂の断片

日本新聞 河東碧梧桐

▲赤ン坊の時はそりや丸い顔で、丸い顔で、よつほど見苦しい顔でございました。鼻が低い、妙な顔で、ようまア此の頃のやうに高くなつたものぢやと思ひます。十八位からやうく人並の顔になつたので、ほんとに見苦しいございました。大人になつてあれほど顔の變つた者もあります
まい

▲六つ位からもう鬘まげを結びました、父親が早くなくなつたので殿様へお目見えをせんならんで（大抵八つ位からお

目見えをする）ございましたが、御維新になつてそれはせずにすみました鬘を結ふたなり、三並（良氏）のと二人で小學校（法龍寺内）へ通ひましたが、たつた二人ぎりにぎりが鬘を結ふて居るので、大變いやがりました、切つて呉れく言ひました

▲上下着の時には（五歳の十一月十五日）かたし金巾かなきんの紋付をこしらへて、上下は佐伯の久さんのを譲つて貰ふて、大小は大原の元のを貰ふてさしましたが、何様背が低いので、大小につらされるやうじやと笑はれました。背が低かつたのはえつほど低かつたと見えて、大原の祖父が、朝暗いうちに門に出て居つて、何か知らん小さいものが向ふから來ると思ふと、それがのぼ升じやつたなど、話をよくして居りました

▲小さい時分にはへぼでく弱味噌でございました。松山で始めてお能がございました時に、お能の鼓や太鼓の音におちてくとうく歸りましたら、大原の祖父に、武士の家に生れてお能の拍子位におちるとそれは叱られました。近所の子供とでも喧嘩をするやうな事はちつともございませんで組の者などにいちめられても逃げて戻りますので、妹の方があなた石を投げたりして兄の敵打かたきうちをするやうで、それはへぼでございませす

▲小學校へ行く其前に、祖父の處へ素讀そどくに参りますが、朝暗いうちに起しますから、なか／＼起きませんで、毎朝々々

蜜柑やお菓子を手に持たして目をさまさせます。さうせんと起きませんのよ

▲祖父は大變升を可愛がりまして、升はなんぼたんと教へてやつても覺えるけれ、教へてやるのが樂みぢやといふて居ました

▲小さい時は佐伯の祖父似で左り利きでございましたから、大原の祖父が、お前はお客に往ても一番左りへお座りよ、さうでないよと、まんなかでは人の邪魔になるけれどといふて居りました學校へ行くと先生が右で食べ……といはれるので、お辨當はどしても持つて行きません、右でたべるやうになつたのは、ずつと後のことで此頃でも寝やうによりましては左で食べて居りました

▲升が三歳の時、大原がお客で私と二人で泊まりに往て居りましたら、火事ぢや〜といふので仲間が見て來ましたら、大變々々正岡が火事ぢやと言います。そこで升をおんぼして歸つて來ますと、もう火事もお仕舞ひになつて、龍吐水も去ぬる、提灯が澤山戻つて來ますのを見て、升が大變に喜びました、それから後は何でも焼けた〜と言ひまして、ハンコ（頭のヤツコのこと）を落した時も「ハンコ、ヤケタ」ともとらぬ口で言ひました

▲物言ひを覺えるのが、えつほど遅うて、三つの時にも「ハル」といふ下女を呼ぶのに「アブ〜」といふて呼んで居りました。物言ひばかりか、手もえつほど鈍で、紙鳶もえ、

あげず、獨樂もええまはしませんでございました

▲何でも好きな物といふと、南瓜と西瓜が出つてい

▲鬘を切つて後も小さい刀をさして居りましたが、餘戸の祭りで田舎へ行きました時、誰か抜いて見い〜といふたけれども抜けませんのを、陰へ廻つて裏の畑へ出て自分でどうやらかうやら抜きましたら、手を斬りましてな、それでうちへは歸れないといふので、シク〜泣いて居つたこともありませぬ

▲小學校に影浦先生といふのがありましたがそこへ本を習ひに三並の従弟と一所に行きりましたが夜が遅くなると私等が向ひに行きよりました。先生の處では本を讀んでもらひますより、話をしてきかして貰ふのがすきで、それで遅くなるのでございました。大方八犬傳や何ぞの話でございます。或時丁度米藤（大きな呉服屋）の塀の上から下女が顔を出して居たのを畫見たといふので歸りにそれをこわがりました

▲大街道の軍談（講談）を聞きに行きよりました三並の従弟と二人が、永井といふ處で其お錢を借てはき、に行きよりました。何でも一錢、の木戸錢が少し遅く行くと八厘ですむとかいひますのでございましたが、それが後でわかりまして大變に叱られました

▲大原の祖父が死にましたのは升の九つ位でございましたが、何やら管のやうなものでお茶を飲んで居りましたのを

大變うらやまに羨うらやまがつてその後自分が病氣をしたたら、管でお茶を飲まして呉れといふてき、ませんので……

▲私の祖母に當る人は名うてなやかましまでございましたが、升には目も鼻もないやうにやさしうしまして、それはくくえらい自慢をしりました。まアあんな自慢がよう言へる事よと思ふやうな事を言ひまして……升も其ち曾祖母にはよくなつて居りました

▲加藤の弟（恒忠氏）が四書五經ししごきやうを終つたときに歌原のおじいから、何やら彫つた印行のやうなものと肉とを入れた箱を貰ひましたのを、升が四書五經を終つた時に譲つて呉れましたら、大變に喜んで大事にくくして居つたのに、泥棒にとられて仕舞ひました

▲中學校に行きよります中に、東京に出たがつてくくやかましよういふて居りましたが加藤の弟から、西洋へ行く前に來いといふて來ましたので、飛上つて喜で、丁度大原の叔父は留守でございましたから、佐伯の叔父の處へ飛んで往つて……來いといふ手紙の來た翌々日松山を出立しました。單衣物を一枚こしらへるといふので、夜通し縫ふた事など覺えて居ります

▲字は山内傳藏さんといふ人の處へ一年習ひに行きました
が、判紙へ物を書くことが大すきで、昔から半紙はよく使ひよりました

▲十三か十四の時分に類似コレラかに罹かりましたが丁度孟蘭うら

盆ぼんの頃で、松山ではよく味噌をつきますが、其味噌豆を澤山たべたのでお腹なかを下したのでございます。病氣は別にわるいといふこともないので、七日許りして遊ぶやうになりました

▲松山の立花神社といふ天神様へ、六月の廿四五の二日の中に大文字といふて大きに字を清書してあげると、手があがるといふので持つて行きよりました（此習慣今尚ほ存せり）が、升は唐紙や畫箋紙などへ二三人のよせ書きをして大きなくくものをこしらへて、松の木の枝などへ吊るのを樂しみにしておりました。七夕の短冊なども妹と紙が多いぢやの少ないじやのいふて好き好んで書きました

芭蕉臨終記『花屋日記』という本があります。しかしこれは、後に僧文暁の偽書と判明しました。その場に居合あせた弟子の書き残したものではありませんでした。

子規の場合には、大勢の門人がリアルに筆を執つています。特に碧梧桐は、絶筆三句の様子を活写しております。

『子規言行録』に収められている文章とその筆蹟とを見合せていただく、いかに壯絶なものであつたかを理解して頂ける筈です。

君が絶筆

十八日の朝の十時頃であつたか、どうも様子が悪いといふ知らせに、胸を躍らせながら早速駆けつけた所、丁度枕邊には陸氏令閨と妹君が居られた、予は病人の左側近くへよつて「どうかな」といふと別に返辭もなく、左手を四五度動かした許りで静にいつもの儘仰向に寝て居る餘り騒々しくしてはわるいのであらうと、予は口をつぐんで、そこに座りながら妹君と、醫者のこと薬のこと、今朝は痰が切れないでこまつたこと、宮本へ痰の切れる薬をとりによつたこと、高濱を呼びによつたかどうかといふことなど話をし居た時に「高濱も呼びにおやりや」と病人が一言いふた。依つて予は直ぐに陸氏の電話口へ往つて、高濱に大急ぎで來いといふて歸つて見ると、妹君は病人の右側で墨を磨つて居られる。聽て例の畫板に唐紙の貼付けてあるのを妹君が取つて病人に渡されるから、何かこの場合に書けるのであらうと不審しながらも、予はいつも病人の使ひなれた軸も穂も細長い筆に十分墨を含ませて右手へ渡すと、病人は左手で板の左下側を持ち添へ、上は妹君に持たせて、いきなり中央へ

糸瓜咲て

とすら／＼と書きつけた。併し「咲て」の二字はかすれて

少し書きにくさうにあつたので、こゝで墨をついで又た筆を渡すと、こんど糸瓜咲てより少し下げて

痰のつまりし

まで又た一息に書けた。字がかすれたので又た墨をつぎながら、次は何と出るかと、暗に好奇心に駆られて板面を注視して居ると、同じ位の高さに

佛かな

と書かれたので、予は覺えず胸を刺されるやうに感じた。書き終つて投げるやうに筆を捨てながら、横を向いて咳を二三度つゞけざまにして痰が切れんので如何にも苦しさうに見えた。妹君は板を横へ片付けながら側に坐つて居られたが、病人は何とも言はないで無言である。又た咳が出る。今度は切れたらしく反古で其痰を拭きとりながら妹君に渡す。痰はこれ迄どんなに苦痛の劇しい時でも必ず設けてある痰壺を自分で取つて吐き込む例であつたのに、けふはもう其痰壺をとる勇氣もないと見える其間四五分間たつたと思ふと、無言に前の畫板をとりよせる。予も無言で墨をつける。今度は左手を畫板に持添へる元氣もなかつたのか、妹君に持たせた儘前句「佛かな」と書いた其横へ

痰一斗糸瓜の水も

と「水も」を別行に認めた。こゝで墨をつぐ。すぐ次へ

間にあはず

と書いて、矢張投捨てるやうに筆を置いた。咳は二三度出る。如何にもせつなさうなので、予は以前に増して動氣が打つて胸がわく／＼して堪らぬ。又た四五分も経てから。無言で板を持たせたので、予も無言で筆を渡す。今度は板の持ちかたが少し具合がわるさうであつたが其儘少し筋違に

をせと、ひのへちまの

と「へちまの」は行をかへて書く。予は墨をこゝでつぎながら「ぎ」の字の上の方が「ふ」の字のやうに、其下の方が「ら」の字の略したもの、やうに見えるので「をふらひのへちまの」とは何の事であらうと聊か怪みながら見て居ると、次を書く前に自分で「ひ」の上へ「せ」と書いて、それが「ひ」の上へはいるもの、やうなしるしをしたそれで始めて「をせと、ひの」であると合點した其あとはずぐに「へちまの」の下へ

水の

と書いて

取らざりき

は其右側へ書き流して、例の通り筆を投げすてたが、丁度穂の方が先きに落ちたので、白い寢床の上へ少し許り墨の痕をつけた。余は筆を片付ける。妹君は板を障子にもたせかけられる。しばらくは病人自身も其字を見て居る様子であつたが、予は此場合其句に向つて何といふべき考へも浮ばなかつた。がもうこれでお仕舞ひであるか、紙には書く場處はないやうであるけれども、又た書かれはすまいかと少し心待ちにして硯の側を去る事が出来なかつたが、其後再び筆を持たうともしなかつた（碧梧桐）

話の終りに寸感を述べますと、年を追つて子規研究が進む中で最も必要とするものは、年表を付した權威ある、今でなければ、地元でなければ出来ない『子規辞典』がほしいことです。

子規百年は、そのよき機会です。読書の矛盾を解決し、執筆等に簡便なる一冊を編むことは、俳句王国愛媛の急務として、松山子規会諸賢のご尽力に期待したいと考えます。

平成十四年九月十九日 例会講演

松山子規会
初代会長

菅 菊太郎先生(下)

— 札幌農学校時代の面影 —

谷 光 隆

5 例言三則

それは次のようである。

一本会は吾が札幌の地を以て、異日帝国に於ける学問中心の一都市たるべきを信ずると共に、特殊の歴史を以て、此地に設立せられたる、札幌農学校の沿革程度校風等を記述して、一卷となし、之を普ねく、江湖に頒ち、一は以て此地に遊学せんとする青年諸子の伴侶となし、一は以て札幌農学校の真相を世人に紹介せんとするの微意、竟に本書の刊行を見るに臻りたるものとす。

二本書は今四月に稿を起し、五月に了る、日数僅に三十加ふるに、会員諸子、学業の余暇を節して、執筆せるものなれば、字句錯雑、意義自ら重複せるのみならず、加ふるに文体の整一を缺くものあり、是れ本会の観官諸賢に對し、深く謝する所なり

三本書刊行に際し、宮部金吾、大島金太郎、高岡熊雄、永田方正の四君は、親しく校正の勞を取られ、又明峯正夫、

安東幾三郎、岩谷讓吉、菅菊太郎、草場榮喜、森広の諸氏は専ら編輯の任に当りて、各熱心に従事せられ、其他蠣崎知二郎、伊東祐夫の二君も、各其勞を頒たれたるの功勞は、本会の永く存して、忘れざる所とす。

明治三十一年五月下流

札幌農学校内 学芸会

右の末尾に記す札幌農学校の学芸会は、同校の文学愛好家(教官・学生)によつて結成された一種の校友会であり、年数回「学芸会雑誌」を刊行していたが、本書はその同人である学生有志六名が同校に遊学しようとする者のために学校の沿革・現況・特色などを紹介して案内書としたものである。そして、それは彼等が学業の余暇に執筆し一カ月で脱稿したという速成のものであるが、非常な好評を博し、札幌農学校の名はこの書によつて天下に知られるようになったと言われる。

ところで、この間とくに注意されるのは、右の第一項の冒頭に、「本会は吾が札幌の地を以て、異日帝国に於ける学

問中心の一都市たるべきを信ずる」云々とある点である。というのは、ちょうど其の頃明治三〇（一八九七）年、従来東京に限られていた帝国大学が京都にも誕生したので、東京に並ぶ程の高い教育機関としてその内容がようやく充実してきた札幌農学校の帝国大学昇格が議論され始めていた。右の言葉はそうした当時の学内の雰囲気や動向をそのまま率直に反映しているからである。そして、その念願がついに達成されたのはこれより二十余年後の大正七（一九一八）年のことであるから、これは正にその先声をなすものと言つてよいであろう。

次いでまた第三項を見ると、そこには本書の編集委員（執筆者）六名の名が挙がつているが、その中の四名は当時の最上級生であり、菅菊太郎氏もその中の一人である。しかも菅氏は当時、学芸会雑誌の編集責任者であり、また前記『日欧交通起源史』が出版された直後でもあるから、同氏が本書刊行のうゑに果たした役割は蓋し絶大なるものがあつたであろう。その点からいへば、氏はまた北大の前史に一定の功績を残した代表的学生であつたとも言えるのである。

6 目次（細目は略す）

第一章 札幌と学問

第二章 札幌農学校の過去

第三章 札幌農学校の現今

第四章 札幌帝国大学設立の必要を論ず

7 本文

さて、次に本文の内容であるが、これを紹介する前にまず高倉新一郎氏の解題を一部左に引用しておきたい。本稿はこれを指標として本文を抜粋したからである。

『札幌農学校』の内容は先ず札幌の気候・風物・社会が如何に学問にとつて理想の地であるかをのべ、学校の成り立ちを語り、現況を紹介し、最後に札幌帝国大学設立の必要を論じて結びとしている。漢文調で堅くはあるがロマンに富んだ名文で、特に「学生・春・夏・秋・冬」は、農学校生徒の生活を夢多く語つて、後に北大を有名にした寮歌「都ぞ弥生」をすでに散文で歌いあげている思いがする。

漸く工業国化し、都会化し、自然に即した人間と学問の環境を破壊しようとしつゝあつた当時の日本において、この若人の情熱は全国の青年の血を湧かさずにおかなかつた。『自然と人生』等によって自然を賛美して止まなかつた徳富蘆花は間もなく書いた半自伝小説『思出の記』において主人公の義兄に当たる松村清麿を札幌農学校の卒業生として描いた。後異色の農林大臣となつた石黒忠篤氏は五高から東大農学部を経た人であるが、この本を読んで札幌農学校に憧れ受験したが入学出来ず、止むなく前述の途をとつたという。これらはほんの一例にすぎない。この書が札幌農学校に与えた貢献は計るべからざるものがあつた。

右の文を読むと、本書の中でも農学校生徒の生活を夢多く語った部分として、とくに第三章第三節の「学生・春・夏・秋・冬」が高く評価されている。そこで、以下にはその本文を紹介することにするが、但し「春・夏・秋・冬」はその全文を紹介するには余りに長文に過ぎるので、その一部をとりあげて紹介することにする。

学生

読者は知らん、吾か札幌農学校は、由来其学风の卓逸にして、校規肅然其間に横はり、教官の薰陶、学生の自治、他校の得て摸すべからざるの英風は、厳然として存するあるを。然り是れ同校の全国に錚々たる所以にして、時に或は世潮澎湃として襲ふも、時魔悍然として侵すも、決して撓まざるなり、靡せざるなり。寧ろ益々其美粹を練磨し、漸々として之を發揮せり。曾てや東都芝公園の下、僅に双葉を挙げしの嫩芽、今や根柢深く石狩原野の中央を占め、蓓蕾一綻、燦然たる抱星の桜花は、其梢上に咲ひて、正に学生の羅針盤を以て任ずるに非ずや。読者若し津軽海峡を渡り歩を石狩の地に枉げんか、夫のリボン巻篇円形の校帽に其花章を附し、黒羅紗の立襟脊広に同色の洋袴を穿ち、沈実寡言朴然として札幌市街を逍遙するの人士、実に此校の学生なり。知らずや其炯々たる眼一と度之を注かば能く紛乱錯雑の条理を正たし、其一文字に結ひたる口一と度之を開けば演壇上光彩を添ふるを。況んや故山の月を捨て郷里の父母を辞し、笈を遠く北海孤島の野に負ひ堅氷と闘ひ、坦

然書を懐にして兀々として学ぶに於ては、已に堅腸剛胆犯すべからざるの概あり。此を夫の遊惰三昧学資を貪り華美を競ひ、義務的学業を取る者と孰れ。今や校生百七十有余名、彼等此校にありて四時生活の状や如何、其特性や如何、是れ余輩の主として読者に報道せんと欲する者なり。

春

協風正に至り農祥晨に中し、皚雪今焉くにかある、唯見る豊平河流漸漫々として赤楊樹白玉を鏤め、臨眺山辺烟霞靄隳として側金盞花春信を伝へり。正に是れ四月の候、風和さ日暄に、茫茫たる石狩の平原は其面目を一新して、牧草の翠漸く加はり、宛転として空枝に轉るの小禽、撲爾として地上に爬ふ幼虫、皆以て半歳蟄居の鬱屈を洩し、見る者として活如たらざるはなし。

此時に当り吾か学生は正に第二期定期試験を終て春季休業に遇するなり。此休暇や日数僅に七、倏然忽ち逝くと雖も、十有余旬北風を耳にし、漸瀝たる氷雪の裡に紅爐を囲みて苦吟せし青年の、如何に滿腔の快絶を以て之を迎ふや。見よ彼等は參々伍々袂を連ねて郊外に鬱を遣れり、或は採集器を負ひて逸早く新生の植物を獲んとするもの、或は玻璃壘を提けて小樽港面に魚介の採集を試みるもの、或は泉水涓々たる定山の溪、熱湯沸々たる登別の山、実に彼等の雄神を遣り精気を鍛ふる好地たらざるはなし。況んや農場土柔かにして耕耘播種の期已に來れるをや。

夏

今や吾学生は遊戯會に積鬱を散し、修学旅行に心神を洗ひ、一転して其得たる者を精注せしむべき奮勉多忙の時に遭遇せり、何んぞや、修業大試験之なり。其励精の状況、普く読者の知る処、余輩必ずしも之を記さず、唯特に一言を要する者は、其自主的精神にあり、彼等の多くは独立独行、夫の普通に見るか如き捕盜探繩の愚を学ばず、其勉学をなすや、各々規矩あり順序あり、此を以て不合格者常に少数にして、而して身神や亦健全、綽々として余裕あるもの如し。此れ同校教育の法其宜しきを得、躰育の奨励与つて力ある所なりと雖も、亦以て学生の自治的精神に因らすんばあらず。此に於て余輩は励声一番、内地忙雜に苦しむの青年に此地に遊学するを勧めずんばあらず。東都墨堤の花、嵐山春宵の月、美且艶なり、然りと雖も我が漫々たる大平原に、皎潔の風日を侶とし満腔の抱負を放つて宇宙の大觀を察する者と孰れ、彼の校舍巍然白堊玉を欺く、宏且壮なり、然りと雖も、彼の顔色青白、呼吸切迫、只管バチルスに苦しめらるるにあらずや。此の強壯勇健、元氣勃々平然として艱難に耐ふる者と孰れ。由来大鯨は江湖に産せず、活学は死躰に宿らず、世の学生豈に顧みる所無かるべけんや。

秋

吁秋の氣たる能く人をして感傷せしむ、剛胆悍勇曹操の如きも尚ほ槩を横たへ月明星稀を長嘯せしにあらずや、況ん

や北海の孤島に遊学するの清貧孤独の学生に於てをや。仰き見れば、月明に万戸砧声高し、顧みれば衣破れ靴綻ふ、知らず故郷の父母弟妹如何に此の暮秋を送るや、想て此に至れば誰れか血涙の滂沱たらざるを得ん、然りと雖とも、吾か学生は確かに皆一個の理想を有せり、此精神的修養は、実に農学校開設以来因襲の校風にして、彼等は暇あれば乃ち聖書を翻き、釈奠の経を講し、或は古史を翻きて日本固有の神教を研究する者、或はゲーテ、カーライルの高俊の理想に思想を練る者、各々其好む所に於て学ぶ一ならずと雖ども、長夜兀々として理想を練り胆畧を鍛え、安心立命の礎、信仰悟道の念を得んとするや一なり。此れ同校学生の概して品行方正にして、志純潔、事に当り物に応し、能く事理を窮極して、忍耐不撓、他校に絶尤なる所以なり。

冬

余輩は今此冬間吾か慈師訪問の状を記載するに当り、特に読者に一言せざるを得ず何ぞや、曰く師弟の關係之なり。夫れ我国官私学校多からずとせず、然れ共吾農学校の如き、由来幾多の歴史を有し、校長教官悉く之れ曾て此校を出てたるの名士を戴き、鬢然として学ぶの学校何れにか之を見ん。東都幾多の校舍華は華なり、美は美なり、然りと雖も其師弟の關係に至りては果して美なりや、新聞紙上屢々吾人をして醜聞に驚かしむるに非ずや。師は傭銀を食ほる日雇人夫の如く、弟や亦傲慢不羈好で其の醜を発きて本懐となす者の如く、倫理紊乱、徳義爰に衰へ、此惡風引て全国

に及ぼさんとする者の如し、豈に慷慨に耐へんや。独り農学校や毅然として此毒風に染まず、益々其美粹を発揮して世を戒むる者の如し、是れ斯校の北斗枢星として学校の羅針盤たる所以なり。若し夫れ寒夜月を踏み雪を分けて師を訪んか直に書齋明窓の下に引て、茗を煮じ菓を出して温乎として語る恰も春風和氣の間に在るが如く、恩愛の情眉宇に溢れ、欣慕の念起さざらんと欲するも得ざる也。唯た是れ夫の教場に在りて威嚴堂々犯すべからざるの教授なるを疑ふのみ。此を以て若し或は学校の施政上不満の点あれば、生等遠慮無く其胸中を明かして其意見を問ひ、師亦た喜んで之を聞きて其取捨を告げ、綽然として崖岸なし、此を以て上は本科生より下は予修科伝習科生に至るまで、宛として兄弟の如し、彼の同盟休校の若きは、未だ嘗て本校に見ざる所なり。吁世の教育者豈に鑑みずして可ならんや。

以上、「学生・春・夏・秋・冬」を読み、その叙述を通じて札幌農学校の本色ともいふべき点を挙げると、精神的修養は実に農学校開設以来の伝統的校風であり、学生はみな一個の理想を有して自主的精神に富んでいる。そのため彼等は概して強壯勇健、元氣勃勃、品行方正、志想純潔、堅腸剛胆、沈実寡言、独立独行、忍耐不撓であるという。それはかのクロムウエルの率いた鉄騎隊員の志操行状の如くであり、またクラークの唱道したピューリタニズムの具現そのものである。札幌農学校の学生気質は、たしかに他校には其の例を見ぬ独自のものであったと言えよう。

次にもう一つ補足しておきたいのは札幌帝国大学設立の問題である。これは例言の中でも触れた所であるが、第四章の本文についてもその一部分を紹介しておこう。

翻て我帝国高等教育の普及如何を見るに、官制に於て大学と称し得べきもの、東京帝国大学、及京都帝国大学の二あるのみ。我札幌農学校は程度に至ては大学の資格を具備すれども、未だ他の分科大学あらざるの故を以て、「ユニヴァーシティー」と称する事を得ず、又海軍大学校と云ひ、陸軍大学校と呼ぶも、「ユニヴァーシティー」には非ざるなり。若し我邦を以て支那朝鮮に比する時は、我学政は大に誇稱するに足るべしと雖ども、之を吾等が現在及将来の大競争者たる欧米諸国に比し来れば、何んぞ其軒輊の甚だしきや。東洋の盟主、世界の第一等国を以て任ずる我帝国にして、如何ぞ斯くの如くなる可けんや。然りと雖も、此上我国の或地方に大学を設備するの必要なる事は、既に識者の間に定論あり。京都帝国大学に次ては九州又は北海道の孰れにか「ユニヴァーシティー」の建設せらるべき事は疑ふべからず。而して熊本帝国大学を先にせんか、或は札幌帝国大学を初めにせんかは、教育家及政治家の熟慮を煩はすべく、吾人の敢て喋々を要せざる所なり。

このように札幌帝国大学の設立は当時の札幌農学校の学生・生徒（本科では学生、予科では生徒といつた）にとつて最大の関心事であつたが、その農学校は結局、一九〇七（明治四〇）

年にいったん東北帝国大学農科大学として発展的解消をとげ、越えて一九一八（大正七）年にいたり、念願の北海道帝国大学として発足したのである。すなわち、札幌農学校は現在の北海道大学の前身であり、その起源をなすものであった。クラーク博士の胸像が同大学の構内に建置されて教学のシンボルとなっているのはその為である。



クラーク博士胸像
昭和60年7月 筆者撮影

9 覆刻本の帯

私の所有する『札幌農学校』は、北海道大学図書刊行会が北大創立一〇〇周年を記念して出版した覆刻本であるが、その書物の帯には次のような一文が記されている。

創立の息吹きを今に伝える！

札幌農学校生徒は明治24年、新渡戸稲造教授を迎えて学芸会を組織し、雑誌を刊行。論文・詩藻に気を吐き、中でも有島武郎の同級生には名文章家が輩出した。このエネルギーを結集して出版されたのが本書であった。漢文調のロマンに満ちた名文で農学校の全容を紹介、

発売以来たちまち全国の青年を虜にし、札幌農学校を一躍天下に知らしめるに至った。

右の文は主として前出、高倉新一郎氏の解題に依拠したものであるが、それは兎に角として、本書が「札幌農学校を一躍天下に知らしめるに至った」ものであることは注意さるべきであろう。

四 子規文徳の顕彰と松山子規会

以上、私は菅菊太郎先生が札幌農学校に在学中、世にさきがけて単独執筆し刊行した『日欧交通起源史』、および他の五人の編集委員とともに共同執筆して刊行した『札幌農学校』について、これを種々の角度より検証評価しつつ紹介した。

そして、この間、前者においては、先生が人格の修養と国際間の協調をモットーとする新渡戸稲造教授（現行五千円札の肖像を参照）に就いて学び、その師弟関係はもつとも親密で、本書もまたその指導によって成ったことを述べ、後者においては、クラーク博士がその教育の根本方針とした人格の陶冶は、いわゆるピュリタニズムを通じて後進の生徒にも受け継がれ、これにより同校は独自の真摯な校風を樹立し維持していたことを述べた。松山子規会初代会長菅菊太郎先生は、その若き日において、直接間接、こうした大教育家の教育理念に育まれ、その著しい感化のもとにその学識と徳性を磨かれたのであった。

さて、ここで上來繰述した凡百の話柄を一挙に転回し、本稿執筆の今一面の意義を見出すため、松山子規会の本尊である正岡子規その人の人間像に照準を合わせてみよう。

子規が明治三十五年九月十九日に遠逝すると、越えて十一月十五日（奥付は十九日）には早くも小谷保太郎編の『子規言行録』が吉川弘文館より刊行された。それは子規の漢詩、和歌、新体詩、叙事文論、紀行文、隨筆の一部を巻初にまとめ、新聞雑誌に掲載された諸家の追悼文、談話の集録を後段としたものである。そして、その諸家の追悼文、談話の中には、子規の人格、徳性が各人思い思いの言葉で感ずるままに述べられているが、今それらを一々紹介することは省略し、これを総括するものとして、巻頭に掲げる陸羯南の序文、本書発刊の肝煎役である古島一雄（号、古洲・一念）の緒言、および巻末に載せる同人の「日本新聞に於ける正岡子規君」の中から、それぞれその一節を抄出して左に列記することにしよう。すなわち、陸羯南の序文には次のように言う。

何か一芸に秀いでた人は、その芸の爲めに全体の人格を掩はれて仕舞って、只だ芸だけを以て世に持て囃さるゝことが多い。……子規に親炙した人々は皆なその人格の超凡を知って居るが、世間一般ではよく知らぬ。甚しいのは只だ新派俳句の宗匠とのみ思つて居るやうだ、矢張り一芸を以て全体を掩はれた仲間である、子規が文壇に出陣してから僅に十年にて世を去つたのだ

が、十年間のその七年は病床の上で暮した、それで世を風靡した勢力といふものは学問芸術の力ではなく、全く其の人格の超凡な証拠である、僅かに十年の間でシカモ病床の上で俳句や歌で以てアレほどの名声を成したのだ、若し健康であつて尚ほ世間並に二十年も長命したならば、まだ／＼仕事をしたであらう、文学ばかりではなく、政事界にも飛出して仕事をしたであらう、思慮といひ気魄といひ何処にでも当てはまる人格であつた、

これに継ぎ、古島一雄の緒言には次のように言う。

僕が平素君に推服して居つたのは其文学上の智識は論外として其人格の上からは僕の缺點が悉く君の長所であつたから、僕は痛く君に感服して居つたのだが、世人があれ程迄に熱い涙を濺いでやつて呉れた其原因はどこに在るであらう、八年の病牀あらゆる外界の敵と苦戦奮闘した其精力其氣力に在るであらうか、或は明治文学史上其新たに唱へ出したる所論の成功した点に在るであらうか、或は其克己、勉勵、独立、知足の諸徳にあるであらうか、或は其の發達したる常識と剛健なる意思とを以て其天稟の理性を發揮した点に在るであらうか、或は又た其道を楽んで死生の境に悟つた点であらうか、

また、「日本新聞に於ける正岡子規君」では、日本新聞に登載した子規の作品を「かけはしの記」より「病牀六尺」

にいたるまで、年表にして掲げたのち、次のように言う。

嗚呼々々是れが君の日本新聞に於ける十年間の事業である、曰く俳句の革新曰く和歌の革新曰く写生文の創始君が文壇に貢献したのは即ち是れである、然れども僕等が君に学んだのは俳句にもあらず和歌にもあらず写生文にもあらず、即ち人間は如何にして外界の困難と戦ふべきかの問題である、否な人間の氣力なるものが如何程まで事業を遂行し得る乎の問題である、君の人格論に就ては僕の片見よりは寧ろ衆論の一致を見るが適當であると思ふが故に爰に一切僕の所見を略して各諸君の評論を募めた、只だ君が口癖のやうに『野心のない人間ほど始末の悪いものはない』と言つて其友人門人を刺撃して居つた一事は君が人格の一面を見るの参考に資する事が出来るであらう、

このように、陸羯南や古島一雄の言辭を見ると、そこには子規をたんに詩宗文豪として評価するのではなく、それよりもむしろ其の人格にこそ一層敬重すべきものがあることが力説されている。そして、その人格なるものは、これも緒言のなかに、廬山の面目は其見る処の方向に依て其形を異にする、とあるように各人その見方は必ずしも一樣でないが、ここでは子規が口癖のように『野心のない人間ほど始末の悪いものはない』と言つて友人門人を刺撃して居つたという一事にとくに注目したい。たしかに子規の物した諸文を見ると、時々この言葉が使われている。明治二十四

年八月一日、河東兼五郎宛の書簡に

俗気は如何なるものかいふだけ野暮には候へ共つまる処野心とか功名心とか大望とかいふことのあるものは即ち俗気あるものと被存候

とあるのはその一例で、これによると子規の「野心」というのは、「功名心」とか「大望」とかいう言葉とさして変わるものではなかつたようである。そして、子規自らの野心については、同二十九年三月十七日、高浜清宛の書簡に

世間野心多き者多し 然れども余レ程野心多きはあらず 世間大望を抱きたるまゝにて地下に葬らる、者多し されども余レ程に大望を抱きて地下に逝く者ハあらじ 余は俳句の上に於てのみ多少野心を漏らしたり されどそれさへも未だ十分ならず 縦し俳句に於て思ふまゝ、に望を遂げたりともそは余の大望の殆んど無窮大なるに比して僅かに零を値するのみ

とあり、また同年八月二十八日、井林博政宛の書簡に

此頃ハ大分気分よろしくなりたれど前月位迄は毎日く少しづ、苦められ居候 併し苦痛も苦痛だけけれど苦痛は全く取れたとしても猶九尺二間の裏に閉居してゐてはどれだけの仕事が出来可申やこ、切齒に堪へず候 小生が野心の大なることは敢て日蓮に譲らずと存候へども其野心が芽も出さずして枯れてしまふては余りなさけなく候はずや 小生の心底御憫察被下度候

とある。なお、このほか「野心」に類する言葉を使った例

もなかなか多い。そして、漱石の子規評の中には彼には政治家的のムムビションがあった。

という件があるが、おそらくこれにヒントを得たものであろう、虚子の子規評の中にも

居士は常に露骨に野心といふことを口にしてゐた。人間は野心が無けれや駄目だと言つてゐた。野心といふのは名誉心のことである。ムムビションの事である。子規居士の眼から見ると大概な人間は野心がないやうに見えた。縦令あつても皆小さく見えた。居士は古い歴史の中に日蓮とか豊太閤とかいふ大野心家を見出して纔に溜飲を下げてゐた。芭蕉といふ人が居士の氣に入つたのも同じやうな理由に基くのである。

と言ひ、又
居士は自ら大野心家を以て任じてゐた。自分の野心は計り知られぬ程大きいと言つてゐた。其は常に居士の口から唱へられてゐた許りで無く、其随筆や書簡集等を見ればよく判る通り常に筆にもしてゐたのである。と言つてゐる。こうしてみると、子規のいう「野心」とは要するに、不撓不屈、百難に打ち勝つて己が事業を達成しようとする大功名心のことであるが、これをもつて「ムムビション」という語に置き換えるならば、それは直ちにかのクラーク博士のへBoys, be ambitiousを連想せしめるものとなる。この有名な別辞に象徴される札幌農学校に学び、その最も卓越した後継の指導者新渡戸稲造教授に就いた菅

菊太郎先生が、奇しくも後年、子規の文業と遺徳を顕彰する松山子規会の初代会長に選ばれたのは、たんに人事の偶然によるものではない。蓋し天の配合によるものであろう。

註

- (1) 覆刻『札幌農学校』解題(高倉新一郎)参照。
- (2) 同右。
- (3) 蝦名前掲書一〇九頁。
- (4) 高倉前掲解題。
- (5) 蝦名前掲書一一一頁。
- (6) 講談社版『子規全集』第二十二卷 年譜。
- (7) 『子規全集』第十八卷 書簡一。
- (8) 『子規全集』第十九卷 書簡二。
- (9) 同右。
- (10) 『漱石全集』第十六卷 別冊 「正岡子規」(岩波書店、昭和四二年)。
- (11) 高浜虚子『正岡子規』四六一頁(甲鳥書林、昭和八年)。

前号拙稿(中) 正誤表

頁	段	誤	正
12	上	ピューリタリズム	ピューリタニズム
11	下	同 右	同 右

[完]

美の創造者 正岡子規 — 画について — (一)

宇和 宣

「子規会誌」八四号（平成十二年一月号）に、「美の創造者正岡子規一書について」を発表したが、今回は「画について」述べたいと思う。

平成十一年十月二十九日、十一月二十八日にかけて、愛媛県美術館で「子規と写生展」が開催された。その中の一点、子規が、明治三三年六月、熊本にいた夏目漱石に送ったという「あづまぎく」の絵に、くぎづけになった。

細い首の花瓶に挿したあづまぎくの、花弁を一枚一枚丁寧に描き、茎や葉の細かいところまで描写した、ちよつと淋しげで、しかし存在感のある絵である。左半分の余白に次の和歌がしたためてあった。

あづま菊いけて置きけり火の国に住みける君の帰りくるかね（がね）

毎日を六尺の病床で病と闘いながら、漱石の帰京を待ちわびている、切々たる思いをこめた作品であった。

漱石は「子規の画」（明治四四年七月四日）において、

東菊によって代表された子規の画は、拙くて且真面目である。（中略）其処に重厚な好所があるとすれば、子規

の画は正に働きのない愚直ものの旨さである。けれども一線一画の瞬間作用で優に始末をつけらるべき特長を、咄嗟に弁ずる手際がない為に、已を得ず省略の捷徑を捨てて、几帳面な塗沫主義を根氣に実行したとすれば、拙の一字は何うしても免れ難い。

子規は人間として、又文学者として、最も「拙」の欠乏した男であった。（中略）一輪の東菊の中に、確に此一拙字を認める事の出来たのは、其結果が余をして失笑せしむると、感服せしむるとに論なく、余に取つては多大の興味がある。ただ画が如何にも淋しい。出来得るならば、子規に此拙な所をもう少し雄大に發揮させて、淋しさの償としたかった。

一、子規の色「赤」

正岡子規を色で表すと、何色を連想されるであろうか。私は躊躇せず、それは《赤》だと答える。子規は物心が付くと同時に《赤色》を好んで、その後も変わることが無かつ

たという。しかもその生涯は、《赤い》血を吐くことによつて決したと言つても過言ではないと思う。

「子規」とは、言うまでもなくホトトギスのことであるが、昔からこの鳥は、「鳴いて血を吐くホトトギス」と、《血》の代名詞のように言われてきた。子規が敢えて自分の号を「子規」としたのは、咯血を恐れない不屈の精神を表したもので、明治二二年五月九日に、二度目の咯血をしたその翌日、「卯の花をめぐってきたか時鳥」「卯の花の散るまで鳴くか子規」以下四、五十句の俳句を一気に作り、この時から「子規」と号するようになった。

子規とホトトギスの関わりはさらに古く、明治十一年、子規が十二歳の時に作った漢詩の処女作が、奇しくもホトトギスを詠んだものであった。

聞子規

子規を聞く

一声孤月下

一声 孤月の下

啼血不堪聞

啼血 聞くに堪へず

半夜空欹枕

半夜 枕を欹つ

古郷万里雲

古郷 万里の雲

偶然というか、運命というか、子規は生涯に一三五九首の漢詩を作っているが、その処女作で「子規(ホトトギス)」の詩を詠んでいる。

子規は「余は子供の時から自然界の現象がひどく好きであつた」と随筆「赤」の中で言い、「其美しい現象の最要素は色である」と述べ、さらに「天然の色でも其中で最も必

要なものは赤である」と書いている。その理由は、赤は活動的であり、赤には精霊が宿るからだと言っている。例えば、「山深く林茂つた処では気が静まるばかりであるが、そこに赤い鳥居が一つあると気が動いてくる」「広野に出て見ても麦のへりにタンポポが咲いて居るだけではそれ程に無いが、げんげんの四五本もあると、もうたまらなくなる」「こへ寝て居れば精霊は我枕辺に降りてくる」と記している。

子規が三歳の時、家が火事で焼けた。その時子規は、母八重の実家(大原観山邸)へ、母といつしよに行つて泊まっていた。寝入りばなを「火事だ」という叫び声に起こされた。火の手は我が家の方向、母は驚いて、子規を背負つて飛び出したが、曲がり角に来て、火事が我が家と知つたとき、足がすくんでしまつて一步も動けなかつた。けれども背中の子規は、「風に吹き捲く炎の偉大なる美に浮かれて、バイバイ(提灯のこと)バイバイ」とと躍り上りて喜びたり(随筆「我が幼時の美感」という有様であつた。後年この体験を振り返つて、「あくまで惨酷なる猛火に対する美感は如何にありけん此時以後再び感ずる能はず。」(随筆「吾幼時の美感」とも書いている。

また『筆まかせ』「余」では、この火事で悲しかった事は、新調の赤い鼻緒の下駄が焼けたことであつたと言っている。

子規の赤色に対する美意識は、極めて強烈であるが、まだ続く。子規が祖父大原観山の塾へ通つていたころ、詩編の添削の朱色の美しさに見とれる。その時はまだ、添削の

何であるかも、朱色の文字、朱墨の何であるかも知らないで、「ただ其朱黒相交るを見て奇麗と思ひしなるべし 早く年取りて詩を作る様になりたしと思へり」(『筆まかせ』)「哲學の発足」と記している。これは、子規が六、七歳頃のことであるが、こうした夢が、後々自ら朱筆を大いに揮うことにつながって行くのだと思う。

子規の家には、伯父の加藤拓川が送つてきた上等の歌かるたがあつたが、子規はそれが取りたくて、正月を待ちかねたという。その中でも、「曾根好忠の赤き扇は中にもうつくしく感ぜられて、今に得忘れず」(『吾幼時の美感』)と言っている。

また、自分の理想的な書齋を夢見て、「赤」の中で次のように書いている。「其家屋の裝飾は人間のくすんだ色で無く、天然色の派出な色を用ゐたい。例へば談話室は壁も天井も窓掛けもテール掛けも皆真白な色を用ゐたい。テールの上に紅の牡丹を三輪活けて置く。書齋は壁も天井も紙も本の表紙も尽く濃き赤を用ゐて、自分は白い着物着て其中に坐つて居る。それから寝室は四方上下皆野外の緑を描いた画にしてしまふ。其野の一方には奥深い森があつて、赤い鳥居と赤い堂とを見込むやうになつて居る。」子規がその家の中で寝ていると、一人の女神が赤い薄色の薄物を着て現れる。そしてその女神の手が触れると、子規はほーつとなつて、自分の体かひとの体かわからなくなる。女神が空から招くと、子規の靈魂が体を離れて、だんだんと空へ

上がつて行く……。子規はそう書いた後、「此女神が赤の精霊である」と結んでいる。

子規はこのように書きつつ、遂にこうした家に住むこともなく、質素な子規庵の一室で死んでしまふ。しかし子規は、

林檎食ふて牡丹の前に死ななかな

という句を作り、赤い牡丹を愛し、赤い鶏頭を植え、赤い林檎や柿を食べながら、赤い血を吐きつつ、赤色を巧みに使つて、数多くの絵画作品を残した。

二、幼時から少年期へ

今残っている一番若いとき(十二歳)に描いた絵の作品『画道独稽古』と、絶筆の絵と思われる『玩具帖』の「未完成図」(多分玩具の風車か、花笠を描こうとしたものといわれている)が、両方とも赤色が主であるのも、決して偶然ではないように思われる。

赤色は、大抵の子供が好む色だと思ふが、大きくなるにつれて、好みが変わつて行くのではないだろうか。しかし子規は、始終変わることが無かつたのは、赤色に対する感覚が、人一倍鋭く、そこに気が動くままで考えたからで、このような人こそ絵描きになればよかつたと思うのであるが、子規自身もそのように考えていたようである。

随筆集を読んでも見ると、絵についていろいろ書いている。「余は幼き時より画を好みしかど、人物画より寧ろ花鳥を

好み、複雑な画よりも寧ろ簡單を好み。今に至つて尚其傾向変ぜず。〔病牀六尺〕五月十二日と書き、隨筆「画」では、「僕は子供の時から、手先が不器用であつたから、画が好きでありながら、それを画くことは出来なかつた」と記している。子規は手先が不器用といつてゐるが、決してそうではなかつた。それは、書が上手でありながら、下手で恥ずかしいと繰り返し言つてゐるのと同じである。子規は後年、「文学者とならんか、画工とならんか、我は画工を扱ばん」〔病牀論語〕、さらに「僕に絵が描けるなら、俳句なんか止めてしまふ」〔画〕とも言い、画家の下村為山にも次のように言つてゐる。「体が丈夫なら、画家になつてみたく思ふ。」〔子規言行録〕

子規が少年の頃から絵が上手であつたことは、後で述べた『近世雅感詩文』などの扉書きの絵を見ればわかる。それでは子規は、どのようにして絵の勉強をしたのであろうか。当時の小学校も、中学校も、習字の教育には力を入れたようであるが、図画に対しては、そうではなかつた。しかし柳原極堂が、子規と同級の西原武雄に、中学校の教化を尋ねた返事を記したものと、〔「図画科」というのがあつて〕鉛筆画のみ、勿論今日の如き写生画などには之無く候」ということであつた。ということとは、その頃の中学校には画学は正課としてはなく、講師を呼んで課外で教えていたようで、従つて子規は、学校では、あまり絵の勉強はしていなかつたと思われる。

既に述べたように、子規の絵で最も若い時の作は、十二歳で描いた『画道独稽古』の模写である。これを見ると、いかにも素朴で、子供らしいところがある。しかしよく見ると、線の抑揚や強弱など、かなり手慣れた筆遣いを見せて、初めて筆を持つ者に出来る技ではなく、これを描くまでに、相当の習練を経ていることは、だれの目にも明らかである。

子規の母方の祖父大原觀山は、当時有名な漢学者で、幼い子規に大きい影響を及ぼした人である。子規はその觀山の蔵書や、友人の森知之から借りた『画道独稽古』を筆写したり、河東鍛たちから、見よう見まねで、絵を習つたものと思われる。そのことを子規は、「吾幼時の美感」の中で、次のように言つてゐる。

「十二三の頃友に画を習ふ者あり、羨ましくて母に請ひたれど、画など習はずもありなんとて許されず。某友の来る毎に画をかかせて、僅かに慰めたり。」

当時の松山は、絵がかなり盛んな所であつたようである。旧藩時代から、代々の藩の御絵師をはじめ、町絵師として、円山派、四条派の画家も多く、温和な風土とも相まつて、文人墨客の往来も多く、文芸とともに、絵もまた盛んな土地柄であつた。そのことを寒川鼠骨は、「子規居士の絵」の中で、次のように言つてゐる。

「封建時代から明治の初年に至るまで、士人の家庭では、その子女に絵を習はせるのを常とした。文人画風の四君子

を習はせたのだ。士人で四君子ぐらい描けない人は、無いと言つてよいほどであつた。居士も四君子を習つたらしく、その二、三が今も尚子規庵に遺存してゐる。」

四君子とは、言うまでもなく、蘭、竹、梅、菊のことである。

子規庵のシンボルともいふべき蔵沢の墨竹は、子規が心酔し、「松山の宝」と褒め称えた名作である。蔵沢は日本南画の数少ない先覚者の一人であり、松山に南画興隆の基礎を開いた。

その南画がようやく松山に定着し、ちやうど幕末から明治の初期はその最盛期に当たり、子規の絵にも大きな影響を与えたと思われる。

子規の南画志向に大きい影響を与えた人に、祖父の観山をはじめ、河東静溪、武知五友、浦屋雲林ら当時著名な文人たちがいる。中でも武知五友は観山の親しい人で、子規は彼の手本で書を学び、彼から貰つた「香雲」の額を書齋に掲げ、雅号としても用いるなど、特に強い影響を受けている。武知五友は藩校明教館の教授であり、詩文書画の達人であつた。しかし明治維新の新しい体制を快しとせず、「天下の事また見るに忍びず」と、詩作と書画で自らを慰め、晩年は郡中の田舎で私塾を開き、子弟を教育しながら、隠遁仙者のような生活をした人である。そういう五友に対し、若い子規は一種憧れの念を抱き、大きい感化を受けた。そうした文人たちのいう風流韻事、南画の示す超越の精神が、

子規の絵の基盤となり、「南画に非ずんば絵に非ず」という絵画観はこの頃形成され、洋画の洗礼を受けた後まで、その底流となつていた。

子規の最も古い絵は、『画道独稽古』の写本であることは既に述べたが、その表紙には、「明治十一年九月朔日製之」「画道独稽古」「正岡常規」と三行に書いてある。そしてその序文には次のように書かれている。

「此の書は師を求めずして、おのずから画の道に入りしめんと欲するの書なり、故に文字をもつて書き方の手本になぞらへ、図ごとにとごとく筆を下すべき次第をわかつて、そのそばに一、二、三の合符（あいもん）を記し、子供をして専ら学びやすからしめんとす、されど此の書子供のために益あるのみにあらず。狂歌、俳諧を遊ぶ人で席上求めに応ずるの一助にして実に略画、初学の楷梯ともいふべし」

『画道独稽古』とはこのように、絵を描いてゆく順序を分解して、懇切に説いたものであるが、その中には、順序を狂歌風に書いてあつて、作歌の手ほどきにもなる。例えば、一ページの魚を釣つて居るひとの図には、

つり人は十の心に人をそへ五十の杭に小山ひくなり

と書いてある。こう言うのが全部で六九図あつて、最後の一枚まで丁寧な筆写している。

『画道独稽古』については、初めは原作者が誰か知られ

ていなかったようで、寒川鼠骨はこれを、「極めて拙劣な子供用の独稽古と題する絵手本」と、『正岡子規の世界』の中で書いている。画家の下村為山でさえ、昭和三年に「だれのものか分からぬが、ある画手本を写したものと」『子規言行録』の中で言い、また極堂も「子規氏が幼年の折り誰のものか分からぬが、或る手本を写した」と『友人子規』の中で書いている。その後これは北齋が、文化十二年に『略画早指南』の第三編として書いたもので、別名「えつくし」と言われるものであることが判明した。

子規は、友人の森知之から『画道独稽古』を借りて、筆写したのであるが、三歳の時に火災に遭つたため、「貧しき小侍の内には我をして美を感じせしむる者何一つあらざりき。」（『吾幼時の美感』）と嘆き、母から絵を習うことを許されなかつたくらいであるから、まさに砂漠の中でオアシスにたどりついた旅人のように貪るように描き写したのであろうと思われる。その喜びに溢れた筆の勢いが最後まで乱れることなく、衰えることなく描かれている。

子規は明治三五年、大津絵を筆写した時、『幼童稽古帳』の一枚を描き足して「幼童稽古帳とてこれもかりそめの画帳ながら、その意匠のただならぬことよ、その画家の名さへさだかならず」と書いて、

春惜しむ一日画をかき詩を作る

の句を添えている。しかし『画道独稽古』については、何

一つ書き残していないところを見ると、子規もまた、北齋の作とは知らなかったようである。

子規は『画道独稽古』を筆写した翌年、子規を中心とする五友が出した回覧雑誌に、早くもこれを十二分に活かしている。明治十二年四月に発行したと思われる「桜亭雑誌」第一号のこの末尾に、それと思われる挿絵が載っている。この挿絵は、灯籠に鳥がとまっているところで、「此ノ絵ハコレ字ヲ集メ組ミ立テタル者故諸覽者此ノ如ク思ヒ見ルベシ多クハ仮名或ハ数字ヲ用ユ」と注している。『桜亭雑誌』は社長、編集長、書記長みな桜亭山人となっている。桜亭山人とは言うまでもなく子規の号であり、従つて文も絵も、すべて子規自身の作である。

さらに同誌第五号の巻末には、『画道独稽古』の一枚目と全く同じ図が描かれ、その後に「此ノ絵モ第四号ノ如ク字ヲ集メ成ヌ又飾リモ四号ノ如シ……」となつており、第四号にも同じような絵が掲載されていたことを裏付ける。そして、このごろのことを、次のように書いている。

「余は国にあるときは、竹村 安永など皆詩画の友なりければ 出会ひし時の話も皆仙人流の事のみなりき ある時安永松南（森知之のこと）わが家に来り画などかきし折柄 後來学校を卒へなば共に閑居せんの計画をなし 余は其デザインをなし松南に描かしめしが 其画今はなかるべし 其の趣向は正面の山間より瀧落ち 其水は淵をなし潭をなして流る 其岸にある岩石の間に一軒の水亭を立て、

其中に在て詩を賦し水を聴きあるものは即ち我なりし也」(『筆まかせ』「仙人的思想」)

今考えてみれば、僅か十二三歳の少年の考えることとは思えないほど、驚くばかりの老成ぶりである。明治十二年の「桜亭雑誌」に桜亭仙人と号したのも、こういう思想に基づいていたのであろう。文中に「仙人流」とか「閑居」とかあるのは、子規が強烈な影響を受けていた武知五友の生き方そのものである。子規がデザインしたという南画も、おおよそ想像がつくだらう。

当時このような考えを抱いていた者は、子規だけでなく、竹村鍛、三並良、太田正躬、森知之らのいわゆる五友たちで、この中の一人三並良は、「書画会を組織し、詩会同様にやっていた。会する者は大体五人だったが、その他にも二人は在ったかも知れない。子規は最も熱心であり、達者でもあった」(『子規言行録』)といい、さらに子規の「仙人的思想」を裏付けるように、次のように書いている。「山水面を描いていた我々はいつもこんな幽静な地に、住みたもののだと話し合ひ、それを理想にしていた。だが其れよりもまづどこかそんな景色のよい山の中へ、遊びに行かうではないか、と言ふことになり、それでは巖谷が良かろうと決議した。」(『子規言行録』)

巖谷とは岩屋寺のことで、松山から三三三号線を約二五キロ、久万町から面河溪谷へ向かう途中にある四国霊場四十五番の寺である。山中にありながら、海岸山と呼ばれるほど

雲海が名物で、幽邃な所である。子規はこのように、一方においては強烈な自我によって赤色を好みつつも、他方南画をも愛し、「南画に非ずんば画に非ず」と言うまでになるのである。

しかし、子規の仙人的思想は、あまり長続きしなかった。明治十五六年頃は、文明開化の波に乗って、自由民権運動が日増しに強くなり、各政党は華々しい活動を展開して行く。愛媛県では、明治十年六月に特設県会が開設された。県会は、子規らの松山中学校と道一本隔てた所にあり、子規は度々傍聴に行つた。また板垣退助率いる立志社の若者たちが、高知から乗り込んできて、演説会を開いたとき、子規はその宿舎を訪ねたと、極堂の『友人子規』に書かれている。

このようなことが刺激になり、子規は青年会で政治演説をするようになる。その時の草稿「自由何クニカアル」「天将二黒塊ヲ現サントス」などが残っている。子規が明治二一年に書いた『筆まかせ』「演説の効能」の中で、「余は在郷のころ明治十五、十六年の二年は何も学問せず、只政治演説の如きものをなして、愉快となしたることあり、今より見れば大に余の進歩を妨げたるに相違なけれども……」といっている。

三、上京後

子規が上京したのは明治十六年六月であるが、上京後、

共立学校、大学予備門、文科大学国文科などで学んだ。その間絵については何も触れてはないが、それでも風流の心を忘れずに、上京後十年くらい間に、いくつかのスケッチ風のものが残っている。

『筆まかせ』の中に、大谷是空（慶応三年岡山県美作町生まれ）にあてた「お百度参り」という葉書の絵がある。明治二三年是空は、折柄帰省中の子規を訪ねる約束になっていたが、都合で行けなくなったので、お互いに毎日一枚ずつ葉書を出し合うことにし、七十枚くらい続いた。それが『筆まかせ』の中に八枚紹介されていて、内七枚が絵である。

また『筆まかせ』の中には、常盤会寄宿舎の同僚竹村黄塔、伊藤鉄山、新海非風、勝田主計、五百木飄亭らと描いた「画の合作」というのがある。これは明治二三年三月十八日に描いている。同僚もみんな文人趣味をもっていたので、出来上がった作品は俳画的なものであるが、一枚の絵を描くのに、家を描くひと、松を描く人、海岸と舟を描く人、山と月を描いたりと、部分的に描くことによって、全体の出来上がりを楽しむといった、アイデアに満ちた遊びをしていた。出来上がった絵を見てみると、『画道独稽古』によく似た絵があつて、少年時代の影響の大きかったことを示している。

もう一つ、明治二三年十月二三日発行の「つづれの錦」第七集（常盤会寄宿舎文芸愛好者たちによる「紅葉会」の

回覧雑誌）に、子規は俳句と組み合わせて、十枚の絵を載せている。文科大学一年生時の作品である。

子規は上京後の約十年間、すなわち明治二七年頃までは、時々展覽会あたりは見えていたようであるが、真剣に絵の勉強はしていないようである。従つてその間の作品も、少年時代の延長か、その時の気分で描いたスケッチ程度のものに過ぎない。

四、下村為山

絵画において、子規の目を一番早く目覚めさせたのは、下村為山である。為山は本名を二神純孝といい、慶応元年松山に生まれ、早く上京、明治十五年九月に画塾彰技堂の本多錦吉郎のもとに入門して、絵の技術を修めた。愛媛県で油絵をもつとも早く描いた人と考えられる。同門に小川芋銭らがいた。のち小山正太郎の不同舎に入門する。明治二二年に、中村不折とともに、文部省検定済教科書として「小学図画」を著しているところから、理論、技術ともに優れていたと思われる。

子規と為山との関係は、明治三三年、ホトトギス第三巻第五号に、「画」という随筆で子規が、「僕の国に坊主町といふ淋しい町があつてそこに浅井先生といふ漢学の先生があつた。其先生の処へ本読みに行く一人の子供の十余りなるがあつたが、いつでも其家を出がけにその中庭へ庭一ぱいの大きな裸男を画いて置くのが常であつた。それとも

知らず其内の人が外へ出やうとすると、中庭に大男が大物を抱いて居る画があるので度々驚かされる。今日も亦例の画がかいてあつたと其内の人が笑ひながら話すのを僕が聞いたのも度々であつた。其時の幼い滑稽絵師が今の為山君である。」と書いている。

ところが、為山はこの時まだ子規を知らなかつたようで、次の様に言っている。

「自分が子規氏を知つたのは、子規氏が常盤会に居たときであつた。常盤会の監督をしていたのは、自分の親戚に当たる鳴雪氏であつたので、時々鳴雪氏のところへ遊びに行く内、いつの間にか常盤会に入入りするようになり、子規氏とも相知るに至つた。」(『子規言行録』)

子規が常盤会寄宿舎に居たのは、明治二十一年九月から二十四年の十二月までで、鳴雪が舎監になるのは二十二年四月からであるから、子規と為山が會つたのは、その間ということになる。

また子規は、後年次のように書いている。

「十年程前に僕は日本画崇拜者で西洋画排斥者であつた。其頃為山君と邦画洋画優劣論をやつたが、僕はなかなか負けた積りでは無かつた。最後に為山君が日本画の丸い波は海の波で無いといふ事を説明し、次に日本画の横顔と西洋画の横顔とを並べ画いて、其差違を説明せられた。さすがに強情な僕も全く素人であるだけに此実地論を聞いて半ば驚き半ば感心した。殊に日本画の横顔には正面から見たや

うな目が画いてあるのだといはれて非常に驚いた。けれど形似は絵の巧拙に拘らぬといふ論でもつてその驚きを打ち消してしまふた。」(明治三十三年の隨筆「画」)

子規が為山の實地論に半ば感心しながらも、降参しなかつたのは、子規の頭の中には南画の精神があつて、南画絶対であつたからである。南画は一種の理想画であつて、初めから現実を無視している。形が本物に似るとか似ないとかは問題ではなくて、深山幽谷の山水自然の中に仙人が居て、その目がどちらを向いてもかまわないのである。いわば心象画である。だから理屈の上ではわかつていても、画の面白さから考えて、やはり南画を捨てきれなかつたと思われる。

子規は、為山と同郷でもあり、為山の画の才能を認めていたのと、俳句も共にする仲だつたので、時々會つていた。そして画論を闘わせていたが、たまたま明治二十七年「小日本」新聞の編集長だつた子規が、初めての試みとして、新聞に挿絵を載せる計画を立てるが、なかなか適任者がなくて、その執筆者の第一候補に為山を挙げた。その時為山は、松山に帰つてゐた。子規から懇請の手紙を受け取つた為山は、「當時の私は、今のように日本画はやらず専ら洋画を描いて居た」という点もあつたが、「いちいち画材まで指図されては困る」と言つて断つた。

このため、この仕事は中村不折が引き受けることになる。不折と為山は、既に述べたように、小山正太郎門下の俊才

であつた。子規はこの二人から学びもしたし、教へもした。そして、この二人を余すところなく比較論評している。

「二人の優劣は固より容易に言ふべからざるも互に一長一短ありて甲越対陣的の好敵手たるは疑ふべきにあらず。先づ其容貌をいはんに為山氏は丈高く面長く全体にすやりとしたるに反し、不折君は丈低く面鬼の如く髯ほうほうとして全体に強き方なり。為山氏は善き衣善き駒下駄を著け金が儲かれば直に費しはたすに反して不折君は粗衣粗食の極端にも耐へ成るべく質素を旨として少しにても臨時の収入あれば之を貯蓄し置くなり。(中略)為山氏は感情の人に於て不折君は理屈の人なり。為山氏は無精なる方にて不折君は勉強家の随一なり。為山氏は酒も飲み煙草も飲む、不折君は酒も飲まず煙草も飲まず。凡そ此等の性質嗜好の相違はさる事ながら其相違が尽く画の上にあらざるに至つて益興味を感ずるなり。

為山氏の画は巧緻精微、不折君の画は雅樸雄健。為山氏は熟慮して後に始めて筆を下し不折君はいきなりに筆を下して縦横に画きまはす。為山氏は一草一木を画きて画となす事は少からねど不折君は寸大の紙にも猶山水村落の大景を描く癖あり。同一の物を写生するに為山氏のは実物よりも稍丈高く画き不折君のは実物よりも稍丈低く画く。為山氏は何か画いても自分の氣に入らねば直に捨てて顧ず、不折君は一旦画き初めし者はどうでもかうでも仕上げてしまふ。為山氏は調子に乗つて画く調子乗らざればいつ迄も画

ず、不折君は初より終迄孜々として怠らずに画く。此等の相違枚挙に遑あらず。」(『墨汁一滴』六月二十九日)

後年画だけでなく、書にも優れた仕事を残した二人を、そのままざりと書いていて、たいへん興味深いと思う。この二人は、子規が死ぬまで、絵に強い刺激と影響を与えた。反面二人もまた、子規に影響を受けることが多くあつた。

特に為山は、子規に就いて俳句を勉強した。そして『新俳句』と『ホトトギス』に挿し絵を描いて人気を高めた。それがやがて為山の俳画となつて現れるのであるが、為山は、その關係を次のように書いている。

「元来自分は西洋画を本領として居るので、日本画の方は好まなかつた。ところが故正岡子規氏が、明治の俳壇を始められたとき、相共に俳句に親しんでから、多少趣味なるものを了解することができて、これまで真に俳句的の画を描いた人が無いやうに思はれたところから、ひとつ大いに描いてみようと言ふ氣になつて、洋画の傍ら余暇さへあれば、俳画の研究に没頭した。而して句作の力をもつて、ひたすら俳画と俳句とが並行し、同化するやうに努めて、今日に及んだのである。」(大正六年『書画の研究』)

子規が為山に決定的な影響を与えたことは、間違いないと思う。(以下次号へ続く)

下村為山について

高橋 俊夫

為山は、本名を下村純孝と言ひ、幼時「ためさん」と呼ばれた故に、長じて画を描く時、為山の文字を当てて、自ら「いざん」と号したようである。

彼は、慶応元年（一八六五年）に松山市出淵町一丁目四八番戸（現在のコミセンの近く）で、下村純嘏すみもとの次男として生まれた。

純孝少年は、十一才の頃漢詩を学び、後明治十五年、十才の時、漢詩と漢学を学ぶために上京したのであるが、その年の九月に、本多錦吉郎の洋画塾「彰技堂」に入り、洋画を学ぶことになった。この本多錦吉郎の絵が、意外な所で発見された。それは、私が、没後百年記念の、下村為山展の為山作品を探していたところ、県下の短歌界の第一人者、山上次郎氏の主家筋にあたる安藤家において、当主が「こんな古い絵もある」と言つて出して来られた。その絵は、安藤正楽のたつての要望で、為山の師匠の本多に描かせたもので、安藤正楽の甥安藤利喜太の商船学校生制服の姿である。先述の如く、為山は、漢学を修めるために上京したにもかかわらず、洋画家としての道を歩むことになつた。江戸時代は、軸物や、屏風絵など、日本画の時代であつ

たが、（勿論、江戸末期には少しながら洋画も入つて来たようであるが）明治時代の夜明けと共に、洋画も徐々に、盛んになり、画塾も、後世の美術界を背負う人材が出て来るようになって来た。なお付言すれば、この本多錦吉郎の顕彰碑は、東京高輪の泉岳寺の山門の前にあり、なめらかな肌の青石で、大変大きく、立派なものである。

為山は、明治十八年、二十一才の時、松山藩の藩医、二神家の養子となつた。そして、結婚二年後、一子（長男）をもうけた。その後、為山の東京に於ける活躍もだんだん認められるようになった。明治二十四年（一八九一年）為山は常盤会寄宿舎に、従兄の内藤鳴雪を訪問し、そこで、彼は、同寄宿舎に入居中の正岡子規を紹介され、子規の俳句会のことを知らされ、鳴雪に入会を勧められて、参加を決心した。この常盤会寄宿舎と云うのは江戸時代の松山藩の江戸下屋敷を、旧藩主、久松家の厚意により、松山から上京して学ぶ学生達のために、開放されたのが最初で、今日も「常盤学舎」として東京都下東久留米に引継がれている。為山は、新俳句の中にあつて、子規から俳号を「牛伴」と名付けられ、短期間のうちに、幹部の席に列せられるこ

とになった。このことは為山のデッサンにおける写生論と、俳句における写実論がある種の共感を呼んだものと推察できさる。

洋画家は、写生やスケッチ、デッサンを大変重視し、又、その練習に多くの時間をかけた。それ故に、写生を重視した。子規の新俳句は、このように、情景や対象を、よく観察してこれを鉛筆など線で描くのがデッサンであり、鉛筆の代りに文字（ことば）を用いたのが俳句となったのであるろうと思われる。

先述の如く、為山は明治二〇年代の後半頃から東京での活動が忙しくなって来た。そこで、彼は、松山に妻子を残しての生活が、もうこれ以上続けられないと、二神家へ二神フジとの離婚を申し入れる決心をし、その交渉のため帰松をした。そして、丁度この頃、すなわち明治二七年、為山三十才の二月に松山に於て、俳句の結社、松風会が発足するに当たり、彼は子規が標榜する新俳句の指導者として、その任に当たった。この時期為山は、虚子や碧梧桐など子規門の人達と交流した。そして、明治二八年に離婚が成立し、以後、為山は、下村姓を名乗ることとなった。又同時期為山は、正岡子規より、彼の関係する所より発行の新聞

「小日本」の挿絵を描くことを依頼された。

当時は、新聞の写真製版などの技術が普及しておらず挿絵は、手描きであつたためであろう。しかし、為山は自分の描く画題を他から指図されるのを大変嫌つた。このような事情もあつて、為山は、東京―すなわち子規の所を離れ、大阪方面に拠点を移して、南海電鉄の初代社長松本重太郎の肖像画を描いている。大阪での活動は短期間で、故郷の伊予へ帰り、各地の有力者達の、支援を得て、為山は、「俳句を絵に描く」又は「絵に描いた俳句」という境地を目指し、彼の言に従えば、「俳画」ではなく「俳味画」という独自の世界を志向し、又、没骨法と呼ばれる技法も習得した。明治三五年九月子規が死去し、その三回忌の折、子規のヒゲ塚のモニュメントとして松山市の正宗寺の中にある子規埋髪塔のデザインも描いた。

また、明治四四年松山市制二〇周年の際に、松山市章を制定したり、松山城や道後温泉の鉛筆画の絵はがきを出した。その後、彼は、大正四年五二才の時、渡辺愛と再婚した。しかし晩年の為山は、神経衰弱や長男新吉の死去、その他の事情で、決して恵まれた境遇とは言えなかつた。彼は、昭和二四年（一九四九年）疎開先の富山県西礪波

郡石黒村において、八五才の生涯を終えたのである。

（松山子規会 会員 平成一四年七月 例会卓話）



寒川鼠骨について

井手康夫

(生い立ち)

お手許の鼠骨の略年譜の通り、明治七年十月三十一日に三番町に生れている。実は私の曾祖父井手正雄（真樟）の住居も三番町で、父もそこで生れている。その場所は三番町九十七番戸で例の「きどや旅館」の向ひ側で通りを隔てた南側（現在の松山中央郵便局のもう一つ西の曲り角辺りであろうか）に在り、その南隣の竹藪越しに鼠骨の生家があつた。

鼠骨の本名は陽光ひまかりで三男坊であり、母とは明治九年秋頃に死別している。明治二十一年に番町小学校を卒業し、九月に伊予尋常中学校（元松山中学校）へ入学、明治二十六年九月に碧梧桐と共に京都第三高等中学校へ入学、同郷の虚子・碧梧桐と共に共同生活を始め、二人の影響で句作を始めたようである。

(子規との出会い)

最初の出合いは明治二十二年の夏頃、鼠骨が中学二年生で幼友達碧梧桐を尋ねた時であつた。「正岡の升のぼさんが来

ておいでるぞな、今お父さんと話をしておいでらい」と碧梧桐が言うので、玄関横の書齋で待つていた。正午頃、奥の座敷の方から足音がして、薄暗い中に白い丸い顔が見えたと思うと「いづれ又来らい、お前も遊びにおいでや」と碧梧桐に言つて早や玄関に降りて去つてしまつた。浴衣がけの白い丸顔、目の長く切れた、やさし味のうちに何処やら冒すことの出来ない、きかぬ気のこもつてゐる目つき、これが鼠骨の子規の初印象であつた。

(子規の看病)

そして子規との初体面は、二十八年七月、鼠骨が松山への帰省途中、神戸病院入院中の子規を見舞つた時であつた。鼠骨は明治三十三年八月頃、陸羯南の懇請により、子規看病の為、子規庵の傍に住んでいるが、翌三十四年子規の病状が悪くなると、左千夫や虚子等と共に輪番当直看護に當つてゐる。

子規は「仰臥漫録」の中で「余の内へ来る人にて病氣の介抱はそ骨一番上手也。そ骨と話し居れば、不快の事も遂

にうかされて一つ笑うようになるワ。常に彼は話し上手にて談緒多き上に調子の上に一種の滑稽あれば、つまらぬ事も面白く聞かざる事多し。彼の觀察は細微にして且つ記憶力に富めり。其上に彼は人の話を受け継ぐ事も上手也。」とべたほめしている。また、鼠骨は慰さめる話だけでなく、地球儀等の贈物をして喜ばれている。

(ジャーナリストの側面)

それではここで、鼠骨のジャーナリストとしての側面についても触れておきたい。明治二十九年十月・十一月頃、三高を中退後、「日の出新聞」「大阪朝日新聞」等を経て、子規のすすめで「日本新聞社」に入社、明治三十三年、新聞「日本」の編集兼発行の署名人となっていたため、「栃木県官醜聞に関する社説」で官吏侮辱罪に問われ、巢鴨監獄に投獄された。しかし乍ら、ここが人生の面白い所で、この監獄体験記が「新囚人」として「ホトトギス」に掲載され、写生文章家鼠骨の名が知られるようになったのである。子規もまた「獄中のことは君の文によりて伝はり、君の名は獄中記によりて残る位の大切な文章と小生は存じ候」と絶讃の書簡を鼠骨に送っている。

また少し元へ戻るが、明治三十二年の一月、芝紅葉館での「非増租期成同盟会大会」へ取材に行き、鉅毒問題を訴える田中正造の言動に感動し、その後もこの案件を取材、田中正造の知遇を得る等、社会派ジャーナリストとしての

側面も持つようになった。

(子規庵の維持・保存)

鼠骨について最後に触れておきたい事がある。それは子規庵の維持・保存の事である。明治四十四年八月四日、鳴雪・不折・碧梧桐・虚子・鼠骨等旧友が集まり、子規庵保存について相談している。そうして鼠骨が起草して子規庵の土地・家屋の購入費の寄付を呼びかけた。

寄付金は、記念品贈与付の条件が奏効して浄財は集ったが、地主の前田家から、祖先伝来の由緒ある土地故、売却でなく永久貸与との返答があったので、資金の利子を子規庵維持費補助とし、子規遺族(母・妹)に支給することにした。ところが、急転直下、前田家からの要請で子規庵を含む二軒長屋の土地・家屋を買いとらねばならなくなり、子規句碑拓本等での募金活動を経て大正十四年七月二十八日、前田家へ子規庵土地代金一萬三千八百貳拾四円を払って、子規庵保存会に所有権を移転したのである。

更に、大正十二年の関東大震災で子規庵も傾いていたので、旧友会同人の賛同も得て大正十五年に子規庵を新築竣工し、昭和二年には子規遺墨品を収める子規文庫(和式土蔵)も竣工した。

その翌年には鼠骨は、私財を投げ売って子規庵に隣接して保存会事務所を新築し、自分もそこに住み込み東京大空襲を受ける事になる。

昭和二十年四月十四日、東京大空襲は、子規庵の一山一木ごとく灰燼と化し、鼠骨は疎開もせずに、子規庵と子規文庫を守るため根岸に留まっていたので、自分の家財道具もすべて焼いてしまった。

空襲後の混乱と再度の空襲に備え、鼠骨は子規資料をリュックに詰め、各地の知人の安全な處に疎開させ、自らは子規文庫の前に番小屋を建てて盗難に対処した。その警戒にも拘らず、文庫が破られてしまったが、盗まれた物は衣類が主で子規資料は僅少であった。

戦後の混乱の中で子規庵の復興は困難を極めたが、齢七十代の老庵主鼠骨は、虚子等と相談して「承露盤」と「一家二十句」の頒布により、資金寄付を仰ぎ、昭和二十五年六月十九日には、遂に子規庵に新しい畳が入ったのであった。

五十年糸瓜寄りて愚に徹す
子規文庫死を賭し守り忌を修す



(松山子規会 常任理事 平成一四年八月 例会卓話)

平成十三年度正岡子規ほか

研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

○正岡子規

●単行本

親と子の日本史 産経新聞取材班 産経新聞ニュースサ

ーピス 平成十三、三、三十

俳人の生死 小林高壽 新樹社 平成十、八、二十五

作家の自伝21 正岡子規 日本図書センター 平成七、

十一、二十五

子規・写生 没後百年 沢木欣一編 角川書店 平成十

三、五、三十

伝記正岡子規 改訂版 松山市教育委員会 松山市立子

規記念博物館友の会 平成十三、五、一

子規と古典文学 田村憲治 創風社出版 平成十三、八、

三十

子規選集1 子規の三大随筆 増進会出版社 平成十三、

十、十二

正岡子規 死生観を見据えて 宮坂静生 明治書院 平

成十三、九、十九

子規新古 山下一海 武蔵野書院 平成十三、九、二十

五

糸瓜考 正岡子規のへなぶり精神 水佐貫洋 平成十三、

八、三十一

子規選集2 子規の青春 増進会出版社 平成十三、十

一、十二

子規選集3 子規と日本語 増進会出版社 平成十三、

十二、十二

●特集号

糸瓜 平成十三、三 子規没後百年記念 付 別冊 子

規・松山発

短歌現代 平成十三、六 正岡子規の歌

俳壇 平成十三、九 没後百年正岡子規のすべて

俳句 平成十三、九 子規再発見 百回忌のいま

俳星 平成十三、九 子規百年忌記念号

歌壇 平成十三、十 没後百年正岡子規「歌よみ」の

魅力

俳句研究 平成十三、十 子規に学ぶ

短歌研究 平成十三、十 子規没後百年改めて問うそ

の本意

俳句あるふあ 平成十三、十・十一 子規の松山

子規会誌 91号 子規百年祭記念号

歴史と旅 平成十三、十一 正岡子規百回忌記念

国文学解釈と鑑賞 平成十三、十二 正岡子規没後百年

●論 文

子規と江戸俳句 13 最終回 復本一郎 「俳壇」平成

十三、一、十二

子規新古 97～100 山下一海 「未来図」平成十三、一

四

正岡子規とその周辺 140～151 梶中淳 「杜鵑花」平成

十三、一～十二

子規の俳句 10～13、16～20 中川みえ 「春星」平成

十三、一～四、七～十一

子規私注 13～18 伊吹純 「幻桃」平成十三、一、三、

五、七、九、十一

子規と古典文学 20～24 田村憲治 「子規新報」64～

68

子規短歌と万葉集 30～32 片山武 「子規研究」39～

41

子規深展 1～8 山下一海 「未来図」平成十三、五～

十二

歌のことは、俳句のことは 小谷稔 「愛媛アララギ」

平成十三、一

子規短歌の「写生」～観察と想像～ 長谷川孝士 「愛

媛アララギ」平成十三、一

正岡子規の年賀状 和田茂樹 「星」平成十三、一

子規から始める 梶木剛 「短歌現代」平成十三、一

子規をめぐる人々 「松山百点」216

子規と加藤拓川 喜田重行 「えひめ雑誌」平成十三、

一

子規と「仰臥漫録」 和田克司 「子規会誌」88

子規が選んだ檜堂の俳句 今村威 「子規会誌」88
法隆寺をめぐる子規と八一と青々と 田中昭三 「本の

窓」平成十三、二

(特集) 120 俳人の句と言葉に学ぶ 「俳句」平成十三、

二

蒲公英と子規 小林高壽 「子規研究」40

子規四季四十九句 長尾壯七 「子規研究」40

子規「散策集」のころ 平岡まさる 「花みかん」2

中国に訪ねた子規句碑 森島眞 「花みかん」2

中国・大連の子規句碑 今秋にも再建・除幕か 池内央

「えひめ雑誌」平成十三、三

子規一門と蕪村 越後敬子 「国文学 解釈と鑑賞」平

成十三、二

子規の是空あて新出書簡 長谷川孝士 「子規会誌」89

「子規と美術、漱石と美術」あれこれ 原田平作 「晨

103

子規と女性 「子規新報」69

鉢裁の小桜草 阿木津英 「短歌現代」平成十三、六

そきへのきはみ 大辻隆弘 「短歌現代」平成十三、六

写生の妙味 小塩卓哉 「短歌現代」平成十三、六

「われは」八首 今西幹一 「短歌現代」平成十三、六

子規の写生俳句とマスメディア 杉橋陽一 「国文学」

平成十三、七

子規の一茶 矢羽勝幸 「二松俳句」14

子規の俳句の成立 乾燕子 「子規会誌」 90
明治の漢詩界と正岡子規 松本松陽 「子規会誌」 90

子規と狼の句 長尾壯七 「子規研究」 39

正岡子規の星の歌 川井盛次 「子規研究」 41

子規と大原家 和田茂樹 「星」 平成十三、八

子規から百年 坪内稔典 「俳句研究」 平成十三、九

子規管見 松林朝倉 「鶴」 平成十三、九

晩年の子規 中井黄燕 「鶴」 平成十三、九

新出の子規草稿「消息」 和田克司 「俳星」 平成十三、九

九

正岡子規と権藤震二 和田克司 「星」 平成十三、十

文士の散歩みち 根岸・日暮里 「文藝春秋」 平成十三、十

子規の手紙の中の歌 大島史洋 「短歌研究」 平成十三、十一

十一

記念講演「子規、漱石、虚子」 稲畑汀子 「ホトトギス」 平成十三、十二

子規と松山 篠崎圭介 「糸瓜」 平成十三、九

木曾のかけはし 伊吹純 「子規庵春秋」 7

俳人紀行 正岡子規 丸山克彦 「自然」 平成十三、十

十一

向島曳舟川のほとり 小林高壽 「子規研究」 41

○夏目漱石

●単行本

漱石と松山 中村英利子 アトラス出版 平成十三、七、七

七

●特集号

国文学 平成十三、一 新しい漱石へ

国文学解釈と鑑賞 平成十三、三 二十一世紀の夏目漱石

●論文

「ホトトギス」を通った人たち 夏目漱石 24～28

黒川南無観 「ホトトギス」 平成十三、一、三、五、七、九

七、九

虹の橋はるかに： 1～12 大岡信 「俳句研究」 平成十三、一～十二

近代小説考 明治の青春 夏目漱石「彼岸過迄」 1～8

8 野山嘉正 「国文学」 平成十三、五～十二

漱石のユーモアと批評精神 張建明 「本」 平成十三、三

漱石の桜 色相世界のはなやぎ 『虞美人草』と『三四郎』 藤尾健剛 「国文学」 平成十三、四

稲妻の起る宵 夏目漱石と猫 半藤一利 「俳句」 平成十三、六

「こゝろ」を読んだ小学生 宗像和重 「文学」 2～4

夏目漱石と「男はつらいよ」 延広真治 「図書」 平成十三、十

漱石の愛読書 飛ヶ谷美穂子 「図書」 平成十三、十

漱石の愛読書 飛ヶ谷美穂子 「図書」 平成十三、十

漱石の愛読書 飛ヶ谷美穂子 「図書」 平成十三、十

漱石の愛読書 飛ヶ谷美穂子 「図書」 平成十三、十

漱石の愛読書 飛ヶ谷美穂子 「図書」 平成十三、十

漱石日記「女皇ノ遺骸市内ヲ通過ス」の謎 松村昌家

「図書」平成十三、十

○高浜虚子

●論文

虚子百句 37～48 稲畑汀子 「俳句研究」平成十三、

一～十二

「五百五十句」研究 133～144 「花鳥諷詠」平成十三、

一～十二

俳句、国境を越える詩 虚子のフランス吟行 1～11 芳

賀徹 「俳句」平成十三、二～十二

特集・碧梧桐と虚子 「子規新報」68

俳句の中の俳諧 虚子を中心に 岸本尚毅 「国文学」

平成十三、七

虚子、その「宇宙観・死生観」と「花鳥諷詠」 本井英

「国文学」平成十三、七

○その他

●単行本

日露戦争物語 1 江川達也 小学館 平成十三、十、

一

●論文

内藤鳴雪の目で見る古俳句 64～76 復本一郎 「子規

新報」64～76

母八重の正岡子規あて書簡 和田茂樹 「星」平成十三、

二

正岡八重の書簡をめくって 1～4 和田茂樹 「星」

平成十三、三～六

大正末期、昭和初期の為山の手紙 塩崎月穂 「子規会

誌」89

村上霽月の人育て 戒能申脩 「子規会誌」89

ヒーロー列伝伊予人 柳原極堂 「松山百点」219

明治十七年の大可賀の津波と子規の友人の母の書簡 和

田茂樹 「星」平成十三、七

子規を支援した拓川と羯南 和田茂樹 「星」平成十三、

九

霽月と子規忌 三由孝太郎 「洪柿」平成十三、十二

俳人紀行 ホトトギスに繋がる人々 丸山克彦 「自然」

平成十三、十二

子規会誌 第九五号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 平成一四年一〇月一九日

発行所 松山子規会

振替口座 松山市末広町正宗寺内

印刷所 (有)二葉印刷所

電話 〇八九一九二五〇三三八

心を
ゆるめて
ゆつたりと

旬味あふれる会席をたのしみ
あふれる湯にお遊びください。

 道後館

愛媛県松山市道後多幸町7-26 〒790-0841 TEL089-941-7777 FAX089-941-7707

予約専用 ☎089-941-7782 (8:45~20:00) ☎0120-10-4848 (8:45~20:00) <http://www.dogokan.co.jp>

新
刊
案
内

伊予の地域史を歩く

近世の街道と中世の伝承を訪ねる

山内 譲 著 B6判 270頁 定価2,100円

自費出版

お気軽にご相談下さい。
編集からお手伝いさせていただきます。

印刷&出版

(有)青葉図書

〒790-0036 松山市小栗6丁目3-23 ☎ 089 (943) 1165

松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町13-7

巴堂本舗

TEL 089 (941) 3452